

# スポーツ文化について

大 内 進

## 1. 文化ということ

文化は人間によって創造された成果である。その成立根拠は人間の自由の表現にあるので、自然現象のように自然法則に従って成長したり変化したりすることではなく、ある特定の人間の生活状況における欠如、不満、拘束から自己を解放する方向に関心をもち、そこに想定される理想とか価値にあこがれ、その世界の実現に向かって努力するところの自由、の表現である。そこには具体的な仕方で行動するさまざまな道が示され、何かを創造し、たとえば自然に人為的な構造化を加えるなどによって、精神的表現としての世界すなわち文化の具体的成果がある。その場合個人の独創に起源があるとしても、多くの人に認められた社会的文化として、歴史の動向を示唆するに至り、その中に歴史的自己を見出すことにもなる。

自由とは人間を拘束するいっさいのものからその自由の実現によって、直ちに、あるいは明らかに、誰にも認められるような、欠如や、不自由におちいるような場合、その自由は本来的なものではない。少なくともその出発点において、支障のない、またそれを克服して永続する自由実現の世界でなければならない。しかし人間存在は欠如的であり、有限であり、さまざまな限界をもっていて、しかもそのことを自ら意識している。それゆえ、完全な理想を求めつつも、その通りに実現されるとはいえない。であるからこそつねに自由を求め、終わることなく、新たな自由を求めることになるのである。人間は自己を取り巻く状況に対する欠如感から、その欠如を補う、あるいは欠如なき状態に至るために、さまざまな思考をめぐらし、試行錯誤等の後に自由への道を開くのである。しかもそれが必ずしも永続しない。それを承知しつつも、つねに求めてやまないのは、自由の世界への道、すなわち文化的世界への道を宿命的に求めるからである。その特定の自由はその場面の状況の力動的な構造によって具体的に志向される。厳密に言えばそれぞれ固有の状況形成として示されるのであるが、それらの相違にもかかわらずある種の類型が見い出される。状況形成のための自由実現の動向はあるいは理性的であり、あるいは心情的であるであろう。そのような主体と環境との相互限定が特有な文化活動となって、時間化し、したがって歴史化する。ある特定の個人の表現行動が多くの人びとに共感共鳴をもたらし、社会的に流布され、時代の潮流ともなると、時代文化としてその時代的特有性を示すことになる。ある個人的主体の文化活動が、社会的な承認や行動的表現となることは、単純な出来事としてもたらされるのではない。それぞれの世界はその過去の文化を担いつつもその文化の歴史的欠如を経験し、そこに新たな自由の道を求めて、来たるべき時代への予感や予想の中に生きる世界が新たな文化の動向を示唆し、新世代の胎動が代表を登場させるといって

もよいであろう。

文化はまずもって人間の自由由来し、人間生活におけるさまざまな欠如感から、なんらかの仕方解放されることを目指して、現実生活の諸困難が取り除かれる世界を求める表現であり、活動である。それが社会的となり、次第に流布され、洗練され、その出発の精神が明確化し、その志向する価値が明示される。結果からみれば、人間の本来的自由が志向する価値の具体的歴史的表現であり、成果である。本来的というのは、その実現によって直ちに不自由となり、欠如を生ずるような自由であってはならないことであり、その実現によって、その自由がますます発揮されるのでなければならないことである。そうでなければ価値欠如あるいは無価値に引入られることにもなりうるからである。しかし初めに述べたように、人間は有限であり、欠如ある存在である。直接に不自由でないとしても、やがて、いつかは不自由にさらされる可能性をもっている。したがって人間はつねに自由を求めることになる。

時代を代表するような価値志向の中で、それに即して特定の価値実現を目指して自覚的に生きる。そのようにして果てしない活動の中に生きるのが人生であるであろう。それにしても時代の底流をなす文化の上に各人固有の価値実現があるとすれば、時代の根本的な価値観の理解と反省がなければならない。現代は科学技術文明の時代である、といわれる。その源流はルネッサンスのヒューマニズムにあり、それは理性尊重のヒューマニズムであった。人間の自由を理性を通して表現し、実現する世界観がそれであり、真理価値実現の具体的成果が科学技術文明であり、しかもそれが反省されなければならない時代の中におかれわれはあるのである。というのは今やそこに不自由が生じつつあるからである。端的にいて人間尊重の世界観に原点をもちながら、公害、戦争等の人間否定の度が強まってきている。たとえば機械化が進むにつれて人力が不要となり、一般的に体力の低下を招き、体育、スポーツの重要性もさげられ、それに対応して、諸施設も完備し、国民文化的風潮の一環としてスポーツ文化は成長した。このことは科学技術文明の進展の成果として、国民生活が豊かになり、その安定した経済の基盤があったので、教育、文化が発展し、その社会化、大衆化が急速に展開した歴史的経過によることはいままでもない。このことは平和の象徴であるとともに、大衆文化的流行性におし流される可能性をももっている。

## 2. スポーツ文化について

スポーツとはよくいわれるように、ラテン語、ディスポルターレ *disportare* “気晴らしをする” “楽しむ” という意味をもっている。解放されて自由になる喜びと解される。またスポーツマンということばが、紳士の意味をもち騎士の徳、貴族のおもいやり、卓越性、規律、等論理の意味をその“ひとがら”としてもっているといわれる。「スポーツはうっせきしたエネルギーが動的となり、あふれ出ようとする単なる遊戯ではない。というのはスポーツ家は、その元気がなくなりもしくは使いはたされる場合にも、なお戦うのであるから、マラソン走者の何キロかは……衝動的なエネルギーの発散ではなく、まさに高度の成績を必要とするスポーツにおいて、自らと戦い、自己を克服する作業にまで高める。そこでは肉体と精神の両極性が認識される。これは人間的エートスのしるしである。(スポーツと体育 *Sport und Leibeser-*



ziehung<sup>\*1</sup> プレスナー編<sup>\*2</sup> 47頁 略号SL)この引用文にあるようにスポーツを遊戯と区別するのはまじめさと倫理性をスポーツの条件としていることを示している。この区別はもちろんホイジンガやカイヨワの遊戯の定義からすれば、遊戯の中に入ってしまうかもしれないが、スポーツの強調点や独自性が示されている。楽しむがゆえにエネルギーの過剰状態にあって、それを制御し、規則に従うのである。「各人は規則を立派に引き受けるために、いかなる道徳的可能性が示さるべきかを知っている。」(SL 47) 人間は自らを知って、何ものかによって自己形成しようとする存在であるから、単なる自然の傾向性に従うのではなく、人間の自由によって選択し特有の成果を生み出すのである。固有の文化的要素をもち、しかもそれによって楽しみ、すぐれた体力と精神力の緊張的調和によって優劣を競う。その高度の成績や勝利を称賛する。スポーツは真面目で真剣でありながらがらみ遊戯的背景にささえられているといわれる。スポーツは気晴らしであり、楽しみであり、人間の自由の実現であること、業績や能力を競うものであること、ルールをまもり、倫理性を重んずること等はスポーツの定義として欠くことのできない条件である。ホイジンガは彼の著ホルデンス<sup>\*3</sup>において、遊戯は1.自由な行動である。2.日常生活から区別され、持続時間、空間、の制限、規則や倫理性をもつ。3.本気でそうしているのではない。4.遊戯者を心の底までとらえる。5.いかなる物質的利害関係とも結びつかない。6.何かを求めて争うとか、何かをあらわす表現である。7.文化は遊戯という形式の中に成立した。(同書 22～32頁参照)

本気でそうしているのではない、ほんきでしているように偽るというようなものではなく、日常生活、人間関係の事実の象徴であって、理想とか価値、の側面があるのではなかろうか。つぎに物質的利害関係と結びつかないということについて、カイヨワは非生産的活動すなわち富も、いかなる種類<sup>\*4</sup>の新要素も作り出さないこと遊戯者間の所有権の移動を除いて勝負開始と同じ状態に復帰する、といっている。ホイジンガも昔から同じ形式あるいは原理をもっていて、変化はしても、進歩発展しているとはいえないであろう、といってその形式の同一性を主張している。さらに結果については未確定であり、運を伴うことなどが示され、若干の相違はあるが、カイヨワ自身がいうように、ホイジンガの発展的考察がカイヨワの位置であろう。スポーツは自らを知り、何ものかを形成する一つの可能性であるといわれる。スポーツを通して自己の本性を自覚し、訓練し、心身を陶冶することによって、目標の実現に向かって努力する。自己の本性を自覚すること、それを通して、目標を立て、それに向かってあらゆる努力をする。これは文化的活動の本来の意味である。それゆえ、たとえば100米の自己の記録に挑戦して、よりよい成果を求めて努力する活動として、文化の基本的意味をもっている。「人間がそれを単に与えられたものとして、うけとるのみでなく、手を加える課題として経験することは、あらゆる文化の生産的要件である。」(SL 47) 人間の手を加え、努力くふうすることによって、目標を実現することが文化活動であるのだから、それも人間の自由の実現であり、スポーツ文化の意味をもっているのである。さし当たっては、より高度の成績とか記録への挑戦であると

\*1 ゲッチンゲン大学哲学教授

\*2 引用文ヘルムートティエリッチ(ハンブルグ大学哲学教授)

\*3 Yohan Huizinga: HoMoLudens (1938) 高橋訳, 中央公論社

\*4 Roger Caillois: Les Jeux et Les Hommes 1963 遊びと人間 多田・塚崎訳



しても、それを支える基本的価値は精神的価値であっても、記録への挑戦は人間性を向上させるものであっても、損傷するようなものであってはならない。

### 3. 記録への挑戦（そのヒューマニズム的反省）

スポーツはなんらかの意味で記録への、したがってまた勝利への挑戦として、基本的、即戦的訓練によって、自己あるいはチームの最高の可能性をめざす。それが勝利の条件である。この記録を知ることとは自己の反省であり、自己を知ることである。いわば、ソクラテス的動機<sup>\*1</sup>である。このことは自らをコントロールすることを可能にし、そこからより高い記録への挑戦が促進され、最高の魅力としては「人間能力の限界」への挑戦ということに結びつくことであろう。より高度の選手権、たとえば郷土、地方、国民的、国際的というように最高水準にまで結びついて、自己の記録がどの辺にあり、挑戦の可能な段階はどこにあるかを、その都度自覚しつつ、たえず限界の突破を試みて努力する。これがスポーツ家の本領であろう。しかし誰でも生活があり、さまざまな人間生活の中にあるから、むしろ多面的な生活との調和のもとにのみ好記録の可能性もでることになる。スポーツするものの象徴的なしるしは、勝利という最高の栄冠を獲得することにある。しかしスポーツマンシップとしての倫理性を無視することになると、スポーツマンとしては失格である。むしろ人間失格でさえあるのである。ひと度栄冠をかちとると、不知不識の間に社会から超人的に祭りあげられ、場合によっては神がかった、崇拜的存在となる可能性がある。つまり人間の限界に立っていることから、神秘的変容が生じ観衆のみでなく自らもソクラテス的謙虚さにとどまらないで、上述のような暗示によって動かされる可能性もある。普通の人にはありうべからざることが、あり得たという興奮が本来の意味から逸脱することになる。すなわちスター化することによって、自己を超越し、自、他ともに真実を見誤る。これは誤った尊敬であり、誤った自己認識である。そうなれば少しのミスも許されない。フェアな態度に僅かに矛盾することや技術的失敗も許されない。スポーツマンシップの権化のように象徴化され、その実が失われることは、自らをいつわることであり、非人間化の様相を示すことになろう。しかしこれもその社会がでっちあげたので、観衆の側に大半の責任がある。実存としてでなく、非人間的なものとして示されると思われる三つの特徴が次のように示されている。

(1) スポーツがその競技的衝動すなわち、人間本性の挑戦を認め、その本性を身体の陶冶訓練で越え出て、心ならずもその中にあるすべてをできるだけ手渡すように強制するところのかの競技的衝動にスポーツがもとづくならば、スポーツはつねに道具の意味をもっているにすぎない。それは自己目的となりえない。超人の偽神秘的なものはしかしスポーツからかかる奉仕的性格をとってきて、人間を奴隷とする。かようにして人間は非人間的となる<sup>\*2</sup>。

(2) 非人間性のさらなる契機はつぎのことで認められる。スポーツの歴史を概観すると、つねに認められる成績向上の傾向は、全く疑いなく、訓練技術の完全化、特にそれを基礎づける

\*1 汝自身を知れ γνῶθι σαυτόν

\*2 SL 51



スポーツ医学的認識によって示される。かかる訓練方法の洗練化（さし当たってそれを尊敬しななければならないが）はなお他の暗い側面をもっていないかどうか、と今とくに考える。このような側面がありうるという推測に到達したのはスポーツ問題に従事することによってではなく、原子物理学の歴史におけるある出来事に従事することによってである。このまさしく熟考的な物理学者達のもとで、つぎのような問題に目ざめてきている。すなわちわれわれは何を知り、何をなしうるか、ということにまで成長しているかどうかという問題および、人は実現しうるすべてのことを実現しようと欲してよいかどうかという問題に目ざめている。それはたとえ不可能ではないとしても明らかに困難である。人間は何かをなしうる場合に彼に一つの技術的可能性が示される場合、それが原子爆弾である場合でさえも、人間が自身で阻止することを命ずること、は非常に困難である。そのようにしてオッペンハイマーは、<sup>\*1</sup> その兵器（原爆）がひきおこすところの、ありうべき終末を知って……裏切者のようなことばを語った。すなわちその構造の問題は技術的にやさしいので、人はその構造化に抵抗することができないということばを語った。かようにして20世紀のフェウストが悪魔の契約に同意するようにさそわれる。技術的に容易なものは……端的にいって、反抗しがたいものとして示される。……最大の業績能力を出すという刺激のかような技術的容易さにスポーツ医学が本来の医師的観点を後退させるような仕方に負けるというようなことはありえないだろうか。それが医学をそのようにして、業績の奉仕者に入らしめ、人間の奉仕に入らしめないで自己目的としてスポーツを誤用することを助成するということはあるまいか。……オッペンハイマーが、原子兵器のつくり方は技術的にやさしいので、結果的には驚くべきことになるのに、すなわち最大の威力を認めるので人類の名において禁止すべきであるにもかかわらず、技術的容易さに抵抗できず、造ってしまう可能性のあることを指摘したようにスポーツ医はその医学的可能性を悪用する可能性がないとはいえない、といってこの危険性を指摘している。これを医師自ら阻止することの困難性が非人間化の可能性でもあるのである。<sup>\*2</sup>

(3) 最高の業績やスターの位置に久しく定着していることは、スポーツの倫理的崩壊という、いっそう広い事態に導く、(SL 53) というのはそれはアマチュアの定義に反することになるからである。人はこの考え方を守らなければならない。しかしこのアマチュアの問題は社会がスポーツを誤用する場合に生ずる。スポーツのエリートに対して生活の維持の心配をなくするように約束し、スポーツ館をたて、その名声にあわせるため、その体力の管理保護によって、アマチュアの定義に反することになる。これは社会がスポーツを誤用し、本人もそれにならされて、純粋なスポーツの意義から遠ざかって、利得によって動くことになる。(SL 53)

#### 4. 現代スポーツの社会的背景

スポーツのヒューマニズム的反省から、スポーツ文化の背景としての現代社会がどのようなものであり、スポーツとどのような関係をもっているのかについて考察する必要がある。現代は

\*1 Oppenheimer, R. 1904～1967 アメリカ 原子物理学者

\*2 SL 52～53 参照



科学技術文明の時代であるといわれ、その具体的な人間生活への関係は工業化による産業経済の高度の発達、マスコミ、情報機関の発達、そして今や脱工業化社会としての情報化時代であるといわれる。そこで少なくともわれわれの日常生活は工業化社会の体制の中にあり、その生活システムのもとに生きている。機械化された社会、合理的民主的社会においては各人は個人として平等であり、各人の自由を尊重する。他面個人の能力や業績を認め尊重する。能力業績の優劣が生じ、その戦いの渦中において疲労にあえぐ、他面、平等的処置の抑圧の中にある。まじめな日常生活としての職場の緊張は、工業化社会においても存在している。いな、深刻なものがあるともいえよう。職場生活の緊張をほぐし、それと全く別の世界、広く世間の人間としての文化的自由の場が時と所とを職場から区別して求められ、またそれを楽しむということが不可欠な生活体制の一面となる。とりわけスポーツ文化は身体を動かすことによってすべての人にその感覚的理解によって参加できる世界である。今日わが国ではどの地方においても体育施設、スポーツ施設があり、とりわけ職場においても、そのようなスポーツを楽しむ施設がむしろ十分あるようになった。これは戦後飛躍的に拡張された。職場を守り、仕事にはげむための用意であり、人はそこに、気晴らしと楽しみを見い出すのである。スポーツの場においては自由に戦い、勝敗を決して楽しむ、全くその場の中において沸騰し、職場に対しては別天地である。このスポーツ文化がその特有性をもつのは、現代社会の反映として、建築等諸施設は一方において対応し、他面において反対関係をもっている。すなわち職場からの解放というスポーツの存在理由は職場にない場面とか、それと別の次元の用意と利用とがなければならないであろう。大きくいえば工業化社会に対応して、その対立的対応も考慮してその特有のスポーツ文化の世界があるといえることができる。職業とスポーツとはいわゆる相反並存的(ambivalent)な構造をもって、生活の波を形成している。そのような構造の中でスポーツは工場や役所における生活に対する解放であり、合理化された労働界の圧力に対する解放であるから、スポーツの本来の意味を現代社会との密接な関係の中で示している。

## 5. スポーツ文化の問題

### ① 神聖性の問題

最高のまじめさで事を行うだけの価値があるのは神の前に立つことにある。それは人間の魂が至高の存在へ視線を向けたときに遊戯から脱するからである。「それは肉眼には見えない、表現として表わされないあるものが、その中で美しい、神聖な本質的な形式をおびる祭祀」(HL 33)の遊戯として、「神に捧げられた遊戯、人生においてつくす努力のうち最高のもの」(同上 54)とプラトンは考えた。この神聖な境地の表現の中に遊戯を遊戯たらしめ、まじめをまじめたらしめる根源存在をプラトンは意識したのであり、この統一的根拠に立って、人間の遊戯的行為が生じ、その根底にまじめさが、いっさいの真実をあらしめる空なる背景として遊戯をささえているものと考えられる。従ってまじめな遊戯(自由のための掟)がまもられ、汚れなき遊びがある。また無自覚的遊び(遊びの<sup>フツ</sup>埒をこえる可能性のある)は実存の一面である。これらは人生の意味を象徴している。人間は限りある存在である。いづこから来たりいづこへ行くかを知ることでできない、はかない命である。有限な存在として、生の<sup>レック</sup>桎梏の中にある。



それから解放され、よりよく生きようとして精一杯生きている。それは自由な生のためのたたかいであり、自らまじめさそのものの生きざまにもかかわらず自覚されない遊戯の世界におかれている。これを括弧づけ、自覚的に遊戯しつつ平和の生を生きる。神と出会うことによって、最高の遊戯、至高のまじめさに生きる。そこにプラトンの「人間はただ神の遊戯の具である。」ということが示される。この立場から、1. 神との出会い、2. 聖域における遊戯、3. 将をこえる可能性をもった遊戯、すなわち、完全な自由、自覚的自由、無自覚的自由という順序が遊戯の三象面として考えられる。聖なる主体は完全に自由であって、もはや自由を必要としない。というのはなすことがすべて自由であるから、人はこの神事にあずかるとき、平和の生そのものとして自由そのものである。この神の遊戯の具というあり方が純粋な人生の遊戯であり、これに模した遊戯が文化であり、スポーツ文化はこれに属する。この背景として現実の生活、いわゆる俗の世界がある。それは無自覚の遊戯の世界であり、われわれがそこに生まれ、成長し、はたらく世界であり、死にゆく世界である。いわばうきよである。これから脱出して、永遠の生、平和の生、自由の世界、遊戯の保証される世界が求められる。神事は神の自由の表現であって、そこには欠如、誤り、不幸はない。はらい、きよめられた地平にあるから平静であり、永遠の平和の世界であり、救いの世界であるから、それにあずかることは神の具として人間がかかわることであり最高の遊戯として、同時に最高のまじめさである。このような参加が神の前に立つ人間であり、いわゆる真理に魅せられた人間の姿である。スポーツもそこにおいて最高のエクスタシスに至るのである。

## ② スポーツと倫理

スポーツが人間形成にとって重要な意味をもっていることは、その身体的側面のみではなく、その精神性に関しても無視できない。わけても道德性の形成に欠くことはできない。古来健全な身体に健全な精神が宿るといわれているのも心身の密接な関係を示している。けれども両者の相関は全く対応的であるかといえれば必ずしもそのようにのみ認めることはできない。もちろん正堂堂として戦い、相手に対する敬意、礼儀等にかかわる倫理が重んぜられ、そういう精神がはたらかなければスポーツそのものが成立たないであろう。が古代の道義とも必ずしも一致しているとはいえないものがある。オットーノイマンは、スポーツに内在する倫理的内容があるのに、スポーツには本来の倫理的道德の体制が欠けていると述べ、たとえば勝利をめざして努力する競技者は、謙譲、というキリスト教的命令に敵しく対立して、卓越を求めることと対応する場合、なんら自己抑制をしななければならないとは感じない。また長距離走者、もしくはフットボールをするものも、相手をいじわるな打ち負かし方をしてもし他主義の徳にたいして、はずべきことはしていないのであり、またボクサーはだれでもノックアウトを敢行することがキリスト教的人間の慣行に違反しても良心的責めを感じることはない<sup>\*1</sup>という。もちろんスポーツは遊戯の本質を根拠としているから、遊戯的性格をもち、実際生活上の問題と異なるから、条件的なもので、特定の場所と時間の中で全く公平な条件のもとにルールに従って全力をつくす。したがって、その条件の内でも通用することが、人間関係の実際と異なるところをも認めなければならない。もちろんおよそ人間であるならばかくあるべきであるという倫理性は

\*1 オットーノイマン 人格形成のための体育論 SL 211 参照



スポーツの特定のあり方をもつらぬいて通用するものでなければならないが、個々の具体的内容に即した道徳的行為はその表現において特定のものは当然である。がスポーツという特定の場においては承認されるが實際生活では許されないというような道徳は短絡的にはあるとしても、根源的には普遍性によって理解できるのではないだろうか。たとえば上述のノイマンの言うように謙譲、や利他的行為は、敗北主義であって、勝利者の卓越への道と異なることは明らかである。これはどう理解したらよいか。勝つための手段としてルールに反しない限り、いかなる手段も許されるということは、それが倫理的に非難される場合は、将来改正することで解決できよう。前述の問題は根本的なあり方の相違であるかどうか。人命尊重とか公正等はルール形成の条件である。敵を圧倒し実力の優位を誇示し、勝利を賞讃することは、人間関係における同情、謙虚と矛盾しないかどうか。スポーツは気晴らし、楽しみなどを意味し、倫理性をその遂行のための条件としている。それは文化以前の生活の中に、その母体としてあり、倫理的には価値に無関係のものであって、スポーツがその本来の意味を実現するために必要な条件として、道徳性が取り入れられたものと考えられる。なんらかのスポーツに関心をもちそれにおいて、楽しむとともにそれを身につけることによって、その意味を十分に人に発揮するためにさまざまな条件が必要となったのである。たとえば闘争的スポーツにおいては、実戦的闘争ではなく、しかも闘争本能的なものの発散として、気晴らしとか遊戯化すること、人命をそこなうようなことのない、しかも勝利という経験を一定の時間、空間にかぎって可能にするような条件をルールとして取り入れ、それをまもりつつ、競技とか団体スポーツが形成されてきているのである。そのルールを守って、その効果をあげるところに意味がある。人命を尊重し、公正なルールのもとに勝敗を決して、スポーツを楽しむ、という。しかし敗者にとって楽しい経験であるといえたとすればそれはなぜであるか。その場において敗者は残念に思い、悲しくさえなるではないか。そして他日の勝利を目ざして臥薪嘗胆の苦を経験することにもなろう。スポーツはそれ自体としては遊びと異なって全く真剣なものである。謙譲とか利他の徳はそこでは通用しない。これらはフェアとか公正と矛盾する。勝敗を決し、記録に挑戦する場合に要請される徳は人命尊重であり、公正であり、さらに勇気、廉恥に支えられ、正堂堂と戦うことしかない。そのように真剣な場における人間の立場であり、献身的なものであるが、それがスポーツの場としてであること、生か死かという事態ではなく、しかも熱中し全力をつくしながらも、その根底にある遊戯的意味にささえられた虚構であること、いわば日常生活としての働く場を中断して、遊び（ホモルーデンス）の場にある身をおいてのことであるから、日常生活と一線を画し、スポーツそのものにおいて相手に勝ちをゆずったり、相手のために実力を出さなかったりすることは、スポーツの勝敗の厳しさをなくし、スポーツを否定することになる。ではスポーツ家にとって人間として重要な徳、謙譲とか、利他主義ということは不要であるかといえ、それはスポーツにおけるライバルは、それにかかわらない日常経験においてはかえってよき友であり、必要な場において必要な徳を適切に実践する、友情に結ばれることにもなる。徳は時処位に応じて実践さるべきもので諸徳を一貫して求められるものは、いかなる場合でも善意によって貫ぬかれなければならないということである。勝敗はそれだけでは善悪、正邪に関連がない。ルール等に反する場合正義にもとるのである。しかしスポーツの人間関係における最高の態度は、勝敗のただ中であって勝敗をこえ、記録に身命を打ちこみつつ記録の観



念をこえ出ることにあるのではないか。そのようにして勝敗を超越し、したがって同時に善悪の彼岸に立つことにもなる。スポーツを通してわれわれは根源的主体の境地に立つことができる。スポーツは勝利に賭ける遊びである。勝者も敗者も全力をつくし、その戦績に陶醉し、悔いなきプレーの実感、無心の境、いわば神の前に立つ、はらい清められた神聖性の中にある。これがその根本的存在理由である。上述のような諸徳はむしろ、ここから出立し、スポーツ文化的教養として主体化さるべきものであろう。これに反して、単なる利己の野心の手段として、悪用することになれば、全く自己崩壊への道を辿ることになる。現代社会は、スポーツ文化が大衆化して、すべての人がそれに人間生活の一領域を認め、それを楽しみ、教養として身につけるようになった。この大衆がスポーツを方向づける一推進力となる。スポーツそのものの意味もさることながら、それを支える大衆とスポーツ家の道義的態度がスポーツの将来を左右するであろう。

### ③ アマチュア論

アマチュア問題は、社会がスポーツを誤用する場合に生ずるといわれる。現代社会においては、科学技術文明の成果としての工業生産体制の中の生活が一般的となり、合理的都会的生活が指導的意味をもつことによる無味乾燥の生活に潤いのある文化的生活の必要が生じ、わけても身体的活動としてのスポーツが生活の一部に取り入れられ、日常生活、職場生活と区別され、人間生活の中でその位置をもつようになってきた。それこそは自由で、気晴らしで、楽しいものとして、スポーツ愛好者すなわちアマチュアの世界である。それが社会的に流布し、公共の場等において、勝敗を決すること記録をつくり、あるいは団体競技等が行われ、次第に大衆化し、地方、国、国際社会的なものになっていくにつれて、スポーツのエリートが生じ、スターが生まれ超人化されるようなことになった。このエリートにその生活を維持する必要をなくすることを約束し、スポーツ館を建て、観覧席をつくり、社会は国民的名声や政治的威信にあわせるため体力を管理し、保護する、というようなことは結局、たとえば国家のアマチュアを成立させる動機になる。多くの視線が少数のものに集中され、それが報道機関を通して、拡大強化されるにしたがって、アマチュア概念は終わる<sup>\*1</sup>ということになる。その超人的役割は最高の業績を保持する僅かな期間にすぎない。そしてまた栄光の幾年かの後に平凡な無の中に沈下して行くであろう。多くの人によってあまやかされたりしないものはアマチュアとして立派であるが、超人として、観覧的役割を強いられることによって多くの犠牲を払うこともあろう。報酬に対して体力を保持するようにしむけられることには大きく社会の圧力がかかっている。プロの世界に自信をなくして自己喪失的になったり、スポーツの指導者としての職業に入る道も求められよう。プロ化しあるいは、プロ入りすることはそのすぐれた技能にもかかわらず、ホモ・ルーデンスからは逸脱するであろうし、スポーツの生活における意味とはならない。すなわちプロ化したスポーツ家は本来のスポーツとは別の職業的利益追求者として、そのためにスポーツを手段とすることになる。さればといってその超人的業績はしばしば賞讃され大衆支持の中にあるとしても、永続するものではない。むしろアマチュアに徹し、生きる道はその他のものに求めなければならないであろう。社会がスポーツを誤用し、本人もそれにならされて、純

\*1 SL 53～54



粋なスポーツの意義から遠ざかって、利益、利得によって動くことになると、アマチュアの定義を侵すことになる。非常に多くの視線が少数のものに集中させられ、社会大衆の観覧的役割をにない、超人にまで仕立てられるとき、アマチュア概念は終わる<sup>\*1</sup>といわれる。これはアマチュアのスポーツに対する純粋性が失われることであり、社会大衆にあまやかされることにもなる。そのようなことも、最高の業績という高原にさ迷わずかな年にすぎない。スポーツのエリートが、結局報酬のために自らを訓練し、スポーツという重荷というよりは社会の重荷に耐えることが求められる。以上のようなプロへの傾向は消極的評価におわるが、そのような重荷に耐えてそのスポーツの完全な可能性を示すことによって、そのプロの地位が保証されることもあってよいのではないか。その際アマチュアはプロの素晴らしい成績に圧倒されて、勇気を失って、おりてしまうかもしれないこと、スポーツのもっと広い領域の専門化によって効果あるものをどこまでひろげうるか、業績として解されるにすぎないスポーツは労働作業と対応して報酬を支払う義務がどこまで可能であるか、が問題となる。「その尖端的な体育家は学校指導で賃銀でやとわれるべきであるか」<sup>\*2</sup> この問題が解決されることによって「働く人（Homofaber）と遊ぶ人（Homoludens）との間の限界は止揚される」<sup>\*3</sup> というこの解決は満足できるものようであるが、遊ぶ（ホモルーデンス）人間に対する労働的（ホモファーベル）人間の勝利の中でスポーツ家の像は変化する、というのである。というのは体育という広い視野のなかにスポーツは包まれるが、このことは教職という職業によって支配されることによってスポーツそのものの純粋性は危うくされることになる。しかしスポーツの純粋性において生きることも、職としていきることも結局主体性の問題となろう。

昭和55年11月

\*1 SL 53～56 参照

\*2 SL 54

\*3 SL 54